

## 第77回

## 特別支援教育実践研究センターセミナー報告

日 時 平成22年2月11日(木) 祝日

講 師 平澤紀子(岐阜大学大学院教育学研究科准教授)

演 題 学校における発達障害児の支援  
- 困った行動への対応から参加の支援へ -

## 講演要旨

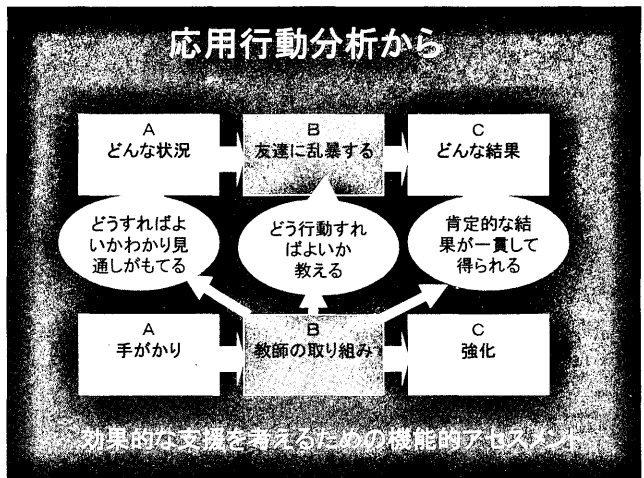
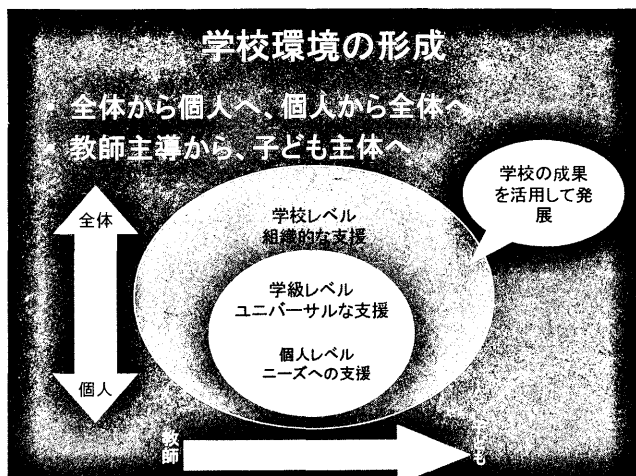
## 1. 学校における発達障害児の支援

始めに、発達障害の支援ネットワーク「発達障害とともに生きる」の紹介があった。障害があり困難があっても、丁寧に教えていけば様々なことに自分の力が発揮できるようになる。発達障害の子ども達の学び、育ちを支援していくことが、社会の中で必要となってきた。支援してきたこと、うまくいったことが、担任が替わると引き継がれていけないという問題点があり、法律、制度として学びを保障していく必要がある。

## 2. 参加の支援に向けて Positive Behavior Support: PBS

発達障害児を含むすべての児童生徒の学業、社会的能力、安全の促進に向けて、見通しをもって、うまくでき、肯定的で一貫した結果が得られる学校環境の形成を目指すSchool wide PBSの必要性が示された(Horner et al., 2005)。個々の子どもへのアプローチだけでなく、すべての子どもを対象に、学校、園全体を変えようといった考え方が重要となる。また、予防という視点も大切であり、問題行動を示す子どもだけでなく、すべての子どものニーズに応えることで、結果として問題行動を起こさなくて済むようになる。このような学校環境をつくりだすには、組織的な支援を行う学校レベル、ユニバーサルな支援を行う学級レベル、個々のニーズに応じて支援を行う個人レベルの3段階に分けられる。それも全体から個へ、個から全体を考えていく視点とともに、教師が配慮することから始め、最終的には子ども自身が見通しをもって対応する力を育むという方向性が大切になる。

これらの支援の基礎となるのが、応用行動分析における先行状況(A)、行動(B)、結果(C)から効果的な支援を考えるABC分析、機能的アセスメントである。



## 3. 学校レベル：組織的な支援

管理職のリーダーシップ、特別支援教育コーディネーターにより、「よい支援」の共有化を行い、学校全体の支援力の向上を図っていく。校内研修も発達障害の概要についてなどのテーマから各学級の支援や成果を共有し、個々の事例から皆が学びやすい環境をつくるのが求められている。組織的な支援の位置づけとしては、①危機回避の対応、②起きたときの対応、③根本的な対応、の3つがある。当座の問題を避けることなく、根本的な対応に進みたい。

また、小学校の通常学級の授業場面において、困った行動が生じやすい活動と、生じにくい活動について明らかにした調査を行った(平澤, 2007)。教師が困った行動が生じやすいとした活動は、「概念で理解し、考える活動」「言葉の説明のみで行う活動」などであり、生じにくいとした活動は「好きな行動」「自分のペースでする活動」などであった。説明を聞く、見るだけでは学べない子どもに、自ら見通しをもって行動し、結果を体験できるようにすることが重要である。「だめ」だけでなく、「〇〇する」が分かって、できることを支援していきたい。

## 4. 学級レベル：ユニバーサルな支援

学級全体が学びやすくなると、発達障害の子ども達も学びやすい。ユニバーサルな支援、分かりやすい手がかりがあることで、学級のすべての子どもが学びやすくなる。支援の手だてと

支援の手がかり3(手だて)		
A: 見通しがもてる状況	B: どう行動すればよいか教える	C: 肯定的な結果が一貫して得られる
<input type="checkbox"/> めあて、ルール <input type="checkbox"/> スケジュール <input type="checkbox"/> 座席、物の配置、設定 <input type="checkbox"/> 活動の流れ <input type="checkbox"/> 始め、終わり <input type="checkbox"/> 一定のやり方 <input type="checkbox"/> 具体的指示促し	<input type="checkbox"/> 準備 <input type="checkbox"/> とりかかり <input type="checkbox"/> とりくむ 一緒に 声をかけて 身振りで 視覚手がかりで <input type="checkbox"/> 役割 <input type="checkbox"/> 先生を呼ぶ <input type="checkbox"/> 尋ねる <input type="checkbox"/> 報告する <input type="checkbox"/> 片付ける	<input type="checkbox"/> できる <input type="checkbox"/> よいことが生じる <input type="checkbox"/> 見届け、評価 自己評価 教師評価 仲間評価 学校 家庭 <input type="checkbox"/> 次のことがわかる <input type="checkbox"/> 周囲の応答

して、見通しがもてる状況、どのように行動すればよいかを教え、肯定的な結果が一貫して得られることが重要である。

校内委員会において共有した支援や教材例の紹介があった。例えば、「休み時間にできること」を示した見通しカードによって、授業中の活動が促進した。これを、他の学級でも必要な子ども達に用いた。園においては、言葉でなく伝える方法が工夫されており、例えば「ここにおくこと」を示す赤いマットなど、子どもが見通しをもって動く手がかりとしていくとよい。

教師がユニバーサルな支援を実施することから進めて、子ども自身が教師に配慮を求めることができるようになる姿を描くとよい。校内研修を通して、学校全体で情報を共有し、どのような支援や配慮をすればよいのかなどが明確になる。これは、学校全体の支援力の向上にもつながっていく。

## 5. 個人のレベル：ニーズへの対応

事例検討会では、①問題を整理する（誰が何に困っているのか）、②子どもの行動を観察する（困った行動が起きる時と取り組んでいる時のABC）、③子どもの行動から支援を考える（どのように行動すればよいかを教える）、④支援を見届ける（うまくいくコツを共有する）といった4段階を行っていくことが望ましい。情報収集には、時間割なども活用する。③では、ABC分析をもとに状況を整理して、本人に分かりやすく伝えていく。どのような状況が苦手で、その状況でどのようにふるまったらよいか教え、体験できると、自ら対応していく力を育んでいける。

困った行動から教育的ニーズを読み解くことが支援を考えるカギとなる。普段は注目されないのに、いたずらをするなど注目される、するといたずらは周囲の注目を獲得する有効な手段となっていく。なぜそのような行動をしているのかを考え、その理由に応じて支援を考えていく。また、多様な状況でどのように行動したらよいのかを教えることが、本質的な支援となる。

## 6. 事例検討会

5で紹介した事例検討会で行う①～④の流れについて、教職大学院の演習で行っている様子をビデオ及び配布資料「事例検討のための行動理解支援シート」を元にした紹介があった。学年主任役が、体育担当の教師の相談に応じながら、支援を考えていくといった内容であった。事例検討の中で、教師及び生徒の困り感を明確にしていた。ABC分析を行い、生徒の「なぐる」と大声を出す、パニックという問題行動の前後の行動を整理した。また、そのような問題行動を起こさなかった状況や対応を観察したことで、問題となる行動が起きる状況（苦手な状況）が明確になった。次に、苦手な状況を教師が配慮することから、本人が自ら対応できる方向への支援策を考え、関わっている教師が見通しをもって、支援できるようにした。教科担任制など、多くの先生がかかわる場合、問題行動を糸口として、その子のニーズを把握し、子どもがどのようにすればよいかを学びやすくしていくことが重要である。

## 文献

平澤紀子（2007）通常学級における軽度発達障害児の気にな

る・困った行動の生起場面に関する調査研究. 平成17・18年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書.

Horner et al. (2005) Schoolwide positive behavior support. In L. M. Bambara & L. Kern (Eds.), Individualized supports for students with problem behaviors: Designing positive behavior plans. Guilford Press. pp.359-390.